

ベトナム山間部ダム建設による再定住集落の居住環境に関する調査研究

—クアンナム省アデン集落の少数民族カトゥ族を事例として—

松田佳子

キーワード：ベトナム、ダム移転、少数民族、居住環境

1. 研究の背景と目的

ベトナム社会主義共和国には 54 もの民族が存在し、国民人口の 8 割以上を占める多数民族と中部高原の少数民族ではその住文化が大きく異なる。中部高原の少数民族の多くは、硬材や竹、藤を用いた茅葺屋根の高床式住居に居住し、血縁者や近隣住民とともに建設する文化を有している。一方古くより中国と関わりが深い多数民族キン族は地床の住居に居住する。高床と地床の居住形式では、それにもなう起居様式や空間構成による生活様式にも違いがある。中部高原の 1 民族であるカトゥ族も伝統的には茅葺屋根の高床式住居に住んでいたが、ベトナム戦争以後様々な影響を受けてその居住環境は大きく変化してきている。経済発展に伴う電力需要の増加に伴い、カトゥ族居住地域でもアヴォンダムの建設によって、2006 年に大規模な移転が行われた。移転対象世帯にはアヴォンダム開発プロジェクトによって再定住集落が用意され、画一的な住居が提供された。これらの新しい居住環境は彼らの生活にどのような変化をもたらしているのだろうか。本研究ではカトゥ族の住居の変遷を踏まえたうえで、再定住地域のアデン集落を事例として再定住地域における居住者の新しい環境への適応状況を明らかにする。

2. 調査方法

2012 年 8 月には、調査対象地であるアデン集落において現地調査を行った。まずは集落の状況を把握するため、実測調査による集落のベースマップの作成、全世帯目視における居住形態の把握を行った。また 10 世帯へのヒアリングと各住居の詳細な実測を通じて、世帯の概要と改築状況、改築要因とその後の住居利用や生活に関する調査を行った。尚、本調査は本大学大学院地球環境学堂教員らによる「民族性に着目したダム開発による村落移転の影響とレジリエンス評価」プロジェクトの一翼を担うものであり、居住環境の変化と適応に焦点を当てて行われた。

3. 調査結果と考察

対象地の住民はキン族の地床の住居形式を希望したにもかかわらず、再定住集落において提供された住宅は 2m 近い床高をもち、鉄筋コンクリートの柱とブロックで建設されたものであった。提供された住宅は主屋と付属屋からなり、ブロック壁の付属屋はトイレと水浴び場、台所の 3 部屋に分かれている。提供された住宅には文化的な相違や機能的な欠陥が存在し、移転後 6 年が経過した集落では住民自らによる改築が非常に多く行われていた。以前の集落で利用していた住居と同様の形式の高床式住居、地床住居を新たに建設することに加え、提供された住宅を改築することによって新しい居住空間を創り出していた。住民が新たに創出した居住空間の総数は集落に提供された住宅数の倍以上にもなっており、1 軒の提供された住宅に対して新たに 5 軒もの住居を建設している世帯もあり、住居の建て詰まりが問題となっている。

詳細な調査を行った 10 世帯においては、移転前より地床と高床の住居を組み合わせた生活を行っていた。生活の基本的な活動である寝食の場に注目して住居の利用をみると、集落内では移転前から世代によってその生活様式が異なっていた。40 代以上の世代は高床式住居の一室で調理・食事・就寝を行うのに対し、若い世代は調理・食事と就寝場所が異なるといった傾向が見られた。提供された住宅は台所が独立した空間構成ではあったが、住居改築を行った結果、各世代ともに以前とはあまり変わらない生活様式を維持していた。特に高床式住居を建設した世帯では、40 代以上の人々は高床式住居で調理・食事・就寝の全てを行っている。ヒアリングから住居改築の動機としては様々なものがあげられたが、キン族の近代的な住居を好み建設した世帯の家主でさえ、自身の生活は高床式住居を基本としている。

対象地の再定住集落において、住民は提供された住宅を受け入れながらも、改築という変化を加えることによって、世代ごとに体になじんだ生活様式を維持して暮らしているという実態が明らかになった。